雪女郎　現代語訳

【雪の精】

寒い冬なのに、あの春の日の朧月夜のように私の目には雲が掛かり、
あなたを想う虜になって、恋に迷ってしまった わたしの心。
忍んで通う山道で恋の恨みを言って、恋の風は吹き抜けてゆきます。
風で雪が傘に積もっても、わたしの積もる思いは
泡雪のように消えてしまう、儚い恋路なのでしょうか。
ああ、いろんな思いが重なって、胸の内は闇だわ。

白雪のわたし、せめて哀れみをとばかり、夕暮れ時に氷辺に出ても、
ちらちら雪で濡れ鷺になって、しょんぼりとした姿が可愛そう。
迷う心の細い流れが、ちょろちょろと水の一筋になってきても
実らぬ恋の恨みのほかは、白鷺として水に慣れた足取りだけど、
濡れても雫となって、消えてしまいます。

わたしは、涙が乾く間もなく、
共寝の肌を合わせて、涙で濡れた袖を乾かせもしない。
あなたとは月影に忍ぶ仲だから、
デートしたとしても、その夜のお話しを捨てて帰るの。

【雪の精】

縁を結ぶ神様を恨んで、最初はすねて神様に無理をお願いしたわ。
そしたら、片思いだったのに噂になっちゃった。
ほんと、涙の氷柱でさえ解けて、デートが嬉しいワン！
でも、ちょっと色気が余って恥ずかしいわね。

須磨の浦辺で海水を汲み取るよりも、
比呂さんの心の内を汲み取る方が難しいのよ。
ほんとだってば。
繻子織の袴の裳 を つまみ取るよりも、
ツルンとして、あなたの心が取りにくいんだもの。
ほんとだってば。

いやあ、ほんとうに
白鷺が羽ばたく風で、羽に積もった雪が散って、
まるで花びらが散り敷かれたように見えるけど、
わたしの惜しい眺めの雪だよ、散ってゆく雪だよ、
散っても美しいでしょう？

【雪の精】

恋に心も移ろって
花の吹雪が身に散り掛かり、払うのも惜しい袖に持つ傘。
傘をね、傘をさすならね、てんてん天気の 日照り傘よね。
それへ、それへと、いろんなものに差し掛けて、
はい、さようならっと。
で、花吹雪なら、花見に来てよ、吉野山に
それへ、それへと、桜の匂う花笠を持って、
縁と月日は廻り来る、くるくる廻るは車傘。

それ それ それ、そうだったわ。
それが あなたとの浮名の始まりだったのよ。
一緒にいても添い遂げられず、
ただでさえ、「いじめ」の刀で死んでしまうというのに、
この世ではさらに 剣の山だったわ。
あなたと同じ木陰に身を寄せるのも
前世からの因縁と思っていたのに、何と その樹の中は
恐ろしい地獄のありさま。

ことごとく閻魔大王が罪を問い糾し
嘘をつけば、まさに鉄の杖で本当に叩かれる。
殺生をした者が 赴く等活地獄、
悪行の結果、動物に生まれる変った畜生の世界、
殺生、盗み、邪淫を犯した者が赴く衆合地獄、
あるいは、殺生、盗み、邪淫の他に
お酒に毒を入れて殺した者が赴く叫喚地獄、
更に嘘までついた者が赴く大叫喚地獄、
阿修羅界に響き渡る太鼓の轟音は止むこともなく、
地獄の番人が方々に群がって、鉄の杖を振り上げ、
鉄の牙と歯をギリギリ鳴らした獄卒たちが追い立て、追い立てる。
それは、一日中ずっと、ぐるぐる ぐるぐる、
追い廻り 追い廻りするの。
そして終に わたしの身は厳しく責められます。
憐れんで下さい、わたしの つらい身の上を。
人に恋したばっかりに、地獄に落ちて、語るも涙となりました。
（雪が死に、その雪の精の姿は消えてどこかに行ってしまいました。）

平成三十一年四月三十日

大中臣 正比呂　抽訳